http://f-env.sakura.ne.jp

府中かんきょう市民の会

NPO法人　府中かんきょう市民の会々報
２０１１年　秋号　10月12日発行／季刊
発行人：竹内　章
連絡先：府中市分梅町　1-20-3
TEL 042-364-3428

ヒガンバナ咲く下堰緑地 台風15号の直撃受ける

府中用水と四谷の風景…撮影9月19日

下堰緑地のヒガンバナと台風被害…上9月19日撮影、下9月24日撮影

観光ガイドツアーの人気スポットに

府中市内の西寄りにある四谷地域では、ヒガンバナが咲きそろいました。隣接する住吉3丁目の間嶋神社も含めて、四谷文化センター周辺の田んぼを彩るヒガンバナ。それに最近デビューした下堰緑地のヒガンバナです。

この下堰緑地のヒガンバナ、府中市観光協会主催の「彼岸花の咲く四谷の田園風景を訪ねる」観光ルートに加えられるなど、市民の人気スポットになりつつあります。

四谷地区はもともと、稲作が盛んな地域であり、多摩川の水を引いた府中用水とともに、春はレンゲが咲く風景が見られ、秋にはヒガンバナが実りの田んぼを彩ってきたころです。

府中かんきょう市民の会では、こうした四谷地区の景観を保全して後世に伝えようと、2005年1月頃からシンポジウムの開催や、『ふるさと景観の保全と創出』を府中市長に求めるなどの活動に取り組み、翌2006年には、四谷5丁目の多摩川へ続く下堰緑地の不法投棄ゴミで荒れ果てた惨状を当会会員が憂い、地域住民と協働して清掃活動と自生ヒガンバナの移植に取り組むなど努力を重ねてきました。

下堰緑地の樹林が台風被害

しかし、9月21日の台風15号による強風で、下堰緑地では20本を越えるニセアカシアが倒れるなど大きな被害を受け、倒木の除去まで立ち入り禁止となりました。

特に根が浅いニセアカシアからクヌギ、コナラなどの樹種への植え替えが今後の課題となります。

NPO府中かんきょう市民の会のホームページURLが変わりました
http://f-env.sakura.ne.jp

がんばっぺし東北！

東日本大震災から7カ月。被災者たちの悲しみと先の見えない苦闘が続くなか支援の輪も広がっています。支援に立ち上がった会員からのレポート特集です。

多賀城市へ清掃ボランティア

山形県生まれの私には数多くの親せきや友人がいます。従妹は原発被害にあい、岩手の友人は行方不明のままです。そんな中、宮城県多賀城市の清掃ボランティアに参加しました。

5月8日の夜に、市民の方から託された義援金や飲料水、衣類など詰め込んで9日の朝7時に着き、義援金は市役所に、物資は多賀城市の市議会議員に手渡し、直ぐにボランティア登録を済ませ6人グループで被災者宅の清掃作業にあたりました。グループの女性はご主人が自衛隊員で復旧作業にあたっていること、タクシー運転手は免停の中で習志野市から参加した等、きっかけは様々でも復旧のために汗を流したい思いは一緒でした。

道具を背負い、30分ほど歩きながらつぶれたままの車やがれきが散乱したままの公園などその悲惨な状況に唖然としながら被災者宅の庭掃除と衣類の洗濯にあたりました。

避難できず二階に駆けあがろうとしたその瞬間に津波が押し寄せ、近所で多くの方が亡くなったことなど、当日の模様を聞きながら、「少しでも震災前の状況に取り戻したい。」そんな思いで庭木の枝の一本一本についたヘドロをとり、土嚢袋に詰め、二人の女性陣も箪笥からとりだした着物を手で洗いながらの作業に「こんなにきれいにしてもらって・・・」その一言で全てが報われたようでした。

多賀城市の被災状況を視察する筆者（右）

宿泊先も被災し、営業再開までの苦労話を聞き、改めて震災の恐ろしさと復興に全力で取り組んでいくことの大切さを身にしみながら帰途に就きました。つい先日、多賀城市から御礼の葉書が届きました。心の底から東北ガンバレ、多賀城頑張れと叫ばずにはいられませんでした。（遠田　宗雄）

写真を撮り支援につなげる

東北の震災地を訪れようと思ったのは、被災地の空気を吸い、ほこりや臭いなどを体験し、写真を撮る。これで支援出来ないかと考えたからです。6月17日深夜バスで仙台まで、そこからあらかじめ手配しておいたレンタカーで仙台市～女川町まで主に海沿いに北上して取材しました。運転と案内をしてくれたのは27歳の女性2人で一人は床上浸水で、もう一人はお母さんと甥ごさんを亡くされ、家も流された被災者でした。石巻漁港はまったく人の気配がありません。歩いているとクロネコヤマトの運転手が「マスクをしないと肺炎になってしまうよ」と2枚くれました。住宅はほとんど流され瓦礫の山。住宅跡に死者を悼むお花等がたむけられていました。お寺も屋根が飛び、お墓は倒れ、荒れほうだいです。そんななか犠牲者の百ケ日の法要の立て看板が目を引きました。「ようこそ女川原発へ」という看板が立っているのに通行止めで近寄れませんでした。今回撮った写真を府中年金者組合の総会や平和チャリティーコンサートの会場などに展示し支援を呼びかけました。

ランドセルだけが残された

再び、7月20日から3日間、石巻の被災者救援センターに行きました。仕事は新鮮な野菜などを被災者に届けることと、要望を聞き、救援センターに伝えることです。ハエが大量に発生していて困る、玄関に網戸をつけてほしい…市議の働きかけで実現。病院や買い物に行くのにバスを走らせてほしい、子どもの遊び場がないなど、多くの要望が寄せられました。（勝谷寛子）

5年前に建てられた石巻市北上支所

気仙沼の被災者に家電を届ける

8月1～2日、宮城県気仙沼市の被災者に家電を届けました。市民から家電を集めて被災地に届けようと、友人が企画したのですが、小・中学生がボランティアとなって、被災地を訪問するという目的もあります。

収集は前日に府中第6中学校で行いました。市の広報や新聞で広く周知をしていたため、冷蔵庫、液晶テレビ、洗濯機、電子レンジ、掃除機、扇風機等345点集まりました。

42名で朝6時に府中を出て、14時に到着。現地の避難所、気仙沼市立松岩公民館には8時頃からすでに10名ほどの被災者が並ばれ、昼過ぎには引換券の配布が終了。「半壊以上のり災証明書」という条件をお持ちの方に限らせて頂きましたが、それでもたくさんの方が並ばれていることに被害の凄さが分かります。

配布は被災者の方に一人、スタッフが付いて一緒に欲しい物を探すという方式を取り、被災者の方から現在の生活等、状況をよくお聞かせ頂けました。

色々な方のお話しを伺い、復興の難しさ、沢山の時間とお金、人間が必要なことを改めて感じました。

あるおばあさんは曲がった腰で山道を30分かけて歩き、数時間も待ち、やっと扇風機を一台。それでも帰りがけ「ありがとうね」と涙ながらに仰って頂いたことがとても印象に残りました。子どもたちも真剣に手伝ってくれて、現場はとても和気あいあいとした雰囲気で終了しました。

気仙沼市、松岩公民館前で家電配布の準備をするボランティアたち

総数516点の家電品を315人の方に配布。私たちが出来ることは小さいですが、それでも仲間たちと被災地の方々が少しでも早く元の生活に戻れる様に何が出来るか考え、行動していきたいと思います。

次回は10月8日、府中グリーンハイツの集会所(晴見町1-28-7)で10時から家電を集め、翌日、陸前高田市に届ける予定です。(須山　卓知)

がんばっぺし！大槌町へ何度も

夫の故郷、岩手県大槌町は人口約16000人の三陸の小さな街。井上ひさしの「吉里吉里人」の舞台でもある風光明媚な土地でした。津波後の報道は「大槌町壊滅」のみ。情報が全く無く、姉達と連絡が取れたのは一週間後。東北道通行禁止解除を待ち、寄付頂いた水、食料、衣類、日用品を車に詰め大槌へ。府中からは約10時間、釜石市内を半分過ぎ突然現れた累々と続く瓦礫、崩れた建物、拉げた車、破壊された防波堤･･･。やっと辿り着いた大槌は、爆撃でも受けたような惨状。街は跡形も無く消え、人口の1割が失われました。津波後の被災者の方々の苦難は想像を超えます。被災地の状況は刻々変わり、必要な支援も「命繋ぐ支援」「暮らしの質を上げていく支援」「生活を作っていく為の支援・街の復興への支援」と変わります。現地と連絡を取りニーズを確認しつつ、ﾈｯﾄﾜｰｸを作りながら「Quality of Life」を大事に顔の見える支援を目指しています。

被災直後の大槌町

幸い友人、地域、南白糸台小「ひょうたん島基金」、ハム製造工場・お菓子ﾒｰｶｰ・横浜ﾄﾞｲﾂ学園・ﾕﾈｽｺ等沢山の方々に応援して頂いています。学校、ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱｸﾞﾙｰﾌﾟ等でのお話会。文化ｾﾝﾀｰ・商工祭り・よさこい・平和祭り等機会があれば、被災地の状況を伝えたい。大槌が元気になるようにTｼｬﾂを作り、暮らしを支える「広場」、「無料ﾘｻｲｸﾙｼｮｯﾌﾟ」の開店準備中。大槌では町復活の為の「菜の花ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ」、水産業復興事業「絆の矢」、「立ち上がれ・ど真ん中・おおつち」が始動！

大槌復興に向け、できる限りの応援をしていきます。

・3/26:津波後初めて大槌へ:食料・水・衣類を避難所へ・4/14:赤浜小、安渡小へ文房具。(ひょうたん島基金からの寄付)、避難所へ食料、衣類・5/3:食料、衣類を避難所へ・5/28:食料、衣類を避難所へ(横浜ﾄﾞｲﾂ学園からの寄付)・6/10:横浜ﾄﾞｲﾂ学園先生と避難所で喫茶店開店・6/25:避難所でﾄﾞｲﾂ学園喫茶店。手作りｹｰｷを持って避難所、広場等訪問・7/9:夏物衣料を避難所へ・7/30:避難所閉鎖に合わせ日用品等支援・8/14:扇風機搬送支援・8/20:仮設での生活物資支援・8/28:たまりばﾕﾈｽｺと「菜の花ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ」支援(前川　浩子)

被災地のワカメ販売で生産者励ます

府中に居ながら被災地支援ができないかと、現地と連絡をとり、その要望を聞き取ったところ、気仙沼でかろうじて被災を免れた海産物があるので、買ってもらえないかというものだった。

被災生産者と消費者の心をつないだ三陸産ワカメ

気仙沼でも、多くの漁業者が被災し、船や漁具などが津波で流されたり、破壊されたりしたが、震災の直前に採取されたワカメが一部の倉庫に残されていたのだ。

三陸のワカメはリアス海岸で養殖されたせいか肉厚で品質がよくブランドものだ。

これを仕入れて、ご近所や友人・知人に勧めたところ市価より安く、美味しいと好評だった。5月の取り組みでは400袋以上を売上げ、上乗せした「利益」を日赤を通じて義援金として託した。

9月になって「あのワカメ、もっと欲しい」との要望を受け、2回目の取り組みをはじめたところ、3月に採取されたワカメはまだ残っており、仕入れることができた。孫がお世話になった保育園でも人気で、バザーで扱いたいからと大量に買って貰うこともでき、被災地支援の輪の広がりも実感できた。

現地では、6月に本格養殖の準備の「種糸」づくりが始まるなど一部でワカメ養殖再開に向けて、立ち上がりつつあるが、生産手段を失ったワカメ養殖者を励まし、同時に消費者にも喜ばれるこの取り組みを、これからも続けたいと思う。(舘　浩道)

『府中市環境保全活動センター』 年内オープン

これまでの経緯

府中市は平成23年12月までに、市民の環境保全活動や市民・事業者・行政の共通の活動を支援する組織として「府中市環境保全活動センター」(以下　活動センターという)の開設を目指し準備が進められています。

活動センターは「府中駅北第2庁舎」の7階、環境政策課内に設置され、市役所の通常時間内であれば誰でも入室できます。

活動センターの設置と運営並びに機能については、平成15年に策定された「府中市環境基本計画」や平成23年3月に策定された「府中市地球温暖化対策地域推進計画」にも明記されており早期開設が望まれていました。

また、平成20年3月に府中市環境推進協議会から市長宛に提言書「環境保全活動の支援センターの在り方について」が提出されていました。

活動センターの機能および事業

活動センターの機能および事業については、既に策定している環境基本計画や地球温暖化対策に明記されている施策を具体的に実践していくために、次の機能を持ち、事業を行う予定になっています。

①環境保全活動に関する場の提供
②環境保全活動に係る普及啓発および相談助言
③環境保全活動を行う個人・団体等の支援並びに交流および連携の促進
④環境保全活動のボランティアの育成と支援
⑤環境保全活動に係る調査研究
⑥地域および小中学校の環境学習の支援および実施

活動センターの運営と管理

活動センターの運営については、活動センター内に「運営委員会」を設け、運営と管理にあたります。また、活動センターには事業の実施を支援・協力する市民や団体が「サポーター」として登録され、「運営委員会」が決定した事業の具体的な企画や事業実施に参加・協力することになります。

またサポーターとして登録されると、活動センター内で、次の事項について原則無料で利用したり、活用することができます。

①ポスターやチラシ、団体の発行する会報および会員募集などの掲示や配布
②活動紹介展示パネルへの掲示
③環境イベントの企画および実施
④イベント情報の提供および掲載
⑤環境関連の研究発表

活動センターに期待

この活動センターの設置は、環境問題を活動テーマとして取り組んできた市民団体として永年の夢でしたが、実現を前にして特に次の機能について考慮されることを期待したいと思います。

①活動センターは、市民や環境市民団体および企業が取り組む環境保全活動を、積極的に支援する拠点となること。

②行政・市民団体・企業の環境に関する活動情報の全容を、一般市民が把握できるような総合的なデーターベースとして構築、提供されること。

③市内で環境分野の普及啓発活動を進めている個人や団体等の人材情報やプログラム情報なども提供されること。

④環境学習講座や環境教育を実施し、人材を育成するとともに、市内で活動している環境学習リーダー、環境カウンセラー、各環境分野のインストラクターなどの有資格者に活動の場を提供すること。

⑤市民に関心を持って貰えるような環境イベントを企画したり、従来行ってきた環境フェスタや府中エコ博などの普及啓発活動を活動センターが中心となって実施できること。

おわりに

府中市では、環境問題を取り組みテーマとして活動している団体は、他の自治体の場合と比較して少ないようです。今回設置される活動センターを拠点として、市民も事業者も、その取り組みを一層活性化させ、「人も自然もいきいきする環境都市・府中」に相応しい自治体となるよう努力したいものです。　(竹内　章)

第10回　　小川の生き物調査

水田や農地が次第に減少しつつある府中ですが、四谷地区は、まだ用水があり農村の原風景が色濃く残っている貴重な地域です。

府中かんきょう市民の会はこの地域で10年前から、用水の景観や生態系を守る一環として「小川の生き物調査」を行っています。

今年は8月7日に、四谷4丁目で行いました。
この日は午前9時には強い日射しに見舞われましたが、用水に到着するころには太陽は雲にさえぎられ、比較的すごしやすくなりました。

都会っ子たちにとって、身近に田舎の遊びが体験できる貴重なチャンスとなった「魚とり」

今回はまた、福島原発事故にともなう放射能の影響を心配したためか、一般参加者は親子で12人と、最近ではすこし少ない状況でした。子どもは小学校低学年と幼児の7人で、ほとんどの子どもは用水体験は初めてで、はじめは親と一緒にコワゴワ用水に入っていましたが、ボランティアの東京農工大生から魚を網に追い込んで捕る方法を教えてもらい、小魚を捕え歓声をあげ、魚をバケツに入れて親に得意顔を向けていたのが印象的でした。

四谷、住吉町、美好町、白糸台のそれぞれの地域からの参加者に印象を聞いてみると、以前に参加した経験があり、楽しかったのでまた参加した人。「魚とり」のことは知っていたが、都合がつかず、今回ようやく参加できてとても楽しく、来年も来たいという人。

また、府中に昔ながらの水田と用水があることを初めて知ったなどとコメントしていました。

原発事故による放射能への懸念についても、心配だが、それ以上に幼児期の魚とり体験は貴重なので参加させたと語ってくれました。

府中用水は数年前に、直接取水方式から、多摩川からポンプで吸い上げる方式に変更されたので、魚の種類と捕獲数は以前より少なくなっています。

今年の捕獲数は、オイカワ16尾、タモロコ33尾、コイ17尾、ドジョウ17尾の、合計96尾でした。
昨年42尾も捕れたアブラバヤが1尾も捕れなかった原因はわかっていません。
その他、昨年まで多く捕れたザリガニが28尾、カワエビ18尾、タニシ6尾などでした。

今年は、昨年の反省から午前中で終わるようにして、9時半から1時間ほど魚とりをして、その後、魚の種類と捕獲数の確認を学生ボランティアに助けられて行い、捕れた魚は持ち帰ってもらいました。

今回は、府中市からの委託事業として10回目の開催となりましたが、ここまで続けられたのは、府中用水組合や東京農工大生ら関係者の理解と協力を得られたことにあります。当会からは会員11人が参加しました。　　（髙橋和夫）

多摩川で野鳥観察

外来種ガビチョウなど25種を確認

多摩川で定期的に野鳥観察をはじめたのは、府中市に自然に関するデータがほとんどないことがきっかけでした。

その後、当会が、府中市と協議をして委託事業として正式に実施する運びとなりました。

観察を始めてみると鳥たちの様子が少しずつわかるようになってきました。4月にツバメ、コアジサシが見られるようになり、セッカが鳴き始めます。セッカは上昇するときと降りるときに鳴き方が違います。やがてキジやヒバリがさえずり6月になるとオオヨシキリが鳴き始め、鳥との出会いが面白くなります。10月以降はカモ類、ジョウビタキなどの冬鳥たちが見られるようになります。12月以降になるとツグミが里に下りてくるようになり、一段と賑わいを見せ、野鳥観察には最適な季節を迎えます。

25年前には「鳥を見て何をするのですか」と言われましたが、現在は「いい趣味をお持ちですね」といわれるようになり、時代の変化を感じさせられます。

定点観察の面白さは多摩川では珍しい鳥との出会いがあります。昨年は、サカツラガン、トモエガモ(♀)、スズガモ(♀)などが見られ、興奮しました。

鳥の観察をしていると河川敷の植物、昆虫などに目が移り、自然全般を学ぶようになり総体を見る目が養われていくようになります。鳥を見るときは鳥だけでなく、周りの環境や自然全体を広く見ることが大切です。自然観察は、人とのつながりや鳥との出会いを楽しみながら、自分自身面白いから長続きするのだと思うようになりました。

コサギ

8月4日(木)　野鳥観察会(晴)

9:00～11:00　参加者6名

コースは郷土の森正門前～郷土の森公園修景池～庭球場脇～多摩川大丸堰～河川敷上流～読売新聞社前信号

郷土の森公園は改修工事が継続的に行われています。鳥たちの鳴く声は少なく修景池はカルガモもいませんでした。

アオサギ

サカツラガン

大丸堰に出るとサギ類が多く見られ、コサギが堰の中を歩き回り餌を捕る様子が見られました。ダイサギ、アオサギはじっくりと餌が近付いてくるのを待っていました。

上空はトビが輪を描きながら上昇する姿が見られ、ツバメは水面を舐めるように飛んでいました。河川敷を上流に向かうと途中でウグイスがさえずり、ヤナギの中にはガビチョウが肉眼でも確認できました。セッカはこの暑さのなか元気良く草地の上を飛び回っていました。

カイツブリ(2)、カワウ(7)、ダイサギ(10)、コサギ(23)、アオサギ(19)、カルガモ(2)、トビ(1)、イカルチドリ(2)、イソシギ(2)、ツバメ(4)、ハクセキレイ(4)、セグロセキレイ(2)、ヒヨドリ(4)、ウグイス(2)、セッカ(9)、シジュウカラ(1)、メジロ(1)ホオジロ(2)、カワラヒワ(2)、スズメ(9)、ムクドリ(3)、ハシボソガラス(4)、ハシブトガラス(6)、外来種はドバト(3)、ガビチョウ(2)で、23種＋外来種2種を確認できました。

(大沢　邦男)

多摩川の植物観察

大活躍の女子サッカー「なでしこジャパン」、その名の由来カワラナデシコ（別名ヤマトナデシコ）が多摩川の河原に咲いているのをご存じでしょうか。

薄いピンクの可憐な花を7月～10月頃まで見ることができます。ただし、希少種なので、どこでも、いつでも見られるというわけにはいきません。

作家の故田中澄江さんが、「戦前の多摩川の河原にはカワラナデシコとオオマツヨイグサが咲き乱れていた」と述べたことがありますが、今ではこの両種に出会うのはかなり困難になっています。

カワラナデシコ

私たちは府中市のボランティア環境調査の一環として、平成17年より、大丸堰から読売新聞府中別館付近までの多摩川河川敷の植物（蕾・花・果実があるもの）を月1回調べています。

調査の目的の一つは、長期にわたり継続して観察・記録することにより、植物をとりまく環境の変化と植物相のかかわりを知ることにあります。

河原、とりわけ低水敷にある植物は、毎年台風などの増水で撹乱を受け、様相を一変させます。前年大群落をつくった植物が突然少なくなったり、別の植物が突然繁茂したりすることは珍しくありません。

私たちが記録に残したいのは、こういった河川特有の短期的な出来事より、10年、20年、さらに、できればもっと長いスパンの植物相の推移です。将来、地球温暖化と多摩川の植物相の関係がわかるかもしれません。

硬い話は別として、春や秋に河川敷を彩る美しい花々を愛で、レンリソウ、カワラナデシコなど希少種や、未知の植物との出会いを楽しみながら、有志のみなさんと調査を行っています。

8月12日（金） 植物観察会 （晴）
参加者6名

オニグルミ・ヒメグルミ・ナガバギシギシ・ギシギシ・オオイヌタデ・イヌタデ・カワラナデシコ・ケアリタソウ・センニンソウ・コゴメバオトギリ・マメグンバイナズナ・カワラサイコ・テリハノイバラ・ワレモコウ・ノイバラ・キンミズヒキ・ムラサキツメクサ・ハリエンジュ・コマツナギ・クララ・シロツメクサ・メドハギ・カタバミ・オッタチカタバミ・オオニシキソウ・アカメガシワ・ニワウルシ・ヌルデ・ヤブガラシ・コマツヨイグサ・ユウゲショウ・メマツヨイグサ・ヤブジラミ・ガガイモ・ヘクソカズラ・メリケンムグラ（初確認）・ヒルガオ・アメリカネナシカズラ・アレチハナガサ・ビロードモウズイカ・キツネノマゴ・ヘラオオバコ・オオバコ・コセンダングサ・ハルシャギク・オオアレチノギク・ヒメムカシヨモギ・ヒメジョオン・ノゲシ・オオキンケイギク・アメリカタカサブロウ・イヌキクイモ・ブタナ・タカサゴユリ・コゴメイ・ツユクサ・セイバンモロコシ・オニウシノケグサ・イヌムギ・シマスズメノヒエ・シナダレスズメガヤ・オヒシバ・メヒシバ・イヌビエ・ネズミノオ・アキノエノコログサ・ノギナシセイバンモロコシ・ツルヨシ・アオカモジグサ・ホソネズミムギ・ノシバ・ケイヌビエ・コスズメガヤ・メリケンガヤツリ・コゴメガヤツリ・カヤツリグサ…以上76種を確認しています。　（野口　道夫）

レンリソウの果実（上）と花（下）。

レンリソウの種子の発芽試験をしたところ、2粒が発芽しました。

援農活動 New Face です

エンノウ ???

今年4月に「エンノウやりませんか？」とお誘いをいただいたときは、すぐには援農の言葉が頭に浮かびませんでした。
しかも、時間は平日の朝8時から10時ということで、他の地域活動とも時間が重複していたため、最初は遠慮させていただきました。

私は地域で「日新小学校　子ども安全ボランティア」という小学生が登下校する際の組織的な見守り活動を数年前から続けており、朝は7時半頃から8時過ぎまで、その活動をしています。

しかし、夏休みに入る前に再度お誘いをいただいたときは、エンノウが援農であることも理解できており、子ども安全ボランティアは夏休みの期間だったこともあり、喜んで参加させていただきました。

たまたま、現在地元で進めている地元四谷5丁目にショッピングセンターを開店させる活動も、今年6月末から前に進みはじめ、地産地消の売り場づくりを地元農家にお願いできるか、も活動テーマの一つになってきたからです。

これまで自宅近くの農家の方とお話ししても、「仕事が忙しくなるだけではないか」、「なにもそんなに働く理由（必要）がない」と消極的な人たちが多かったからです。「農業は自分の世代では続けても、子どもは継ぐ予定はない」とか、「農業をやるより、土地を利用してアパートや倉庫、駐車場などにして貸した方がいい」という話もお聞きしました。

また、「地域別まちづくり方針」の作成で、府中市の各地域でお会いした農家の方も、「市内で農業を続けることに残念ながら消極的にならざるをえない」という発言を伺っていたからです。

今の経済や法律の仕組みの中では、生産緑地の仕組みも、相続があったときの民法や税法の仕組みも、府中のような市街化地域で農家を続けるにはいくつもの高いハードルがあり、そのためもあって、府中市の農地は市制をひいた昭和29年と比較して、当時の13％程度まで減少しています。

※昭和29年約1200ha→平成22年156ha
（資料：府中市農業振興計画他）

そんな中で、援農で伺った農家での作業は、近くのスーパーに出荷するための作業でした。しかも、若い後継者の方も一緒に作業している農家です。こうした農家が農業で生活していける環境が少しでも整うように、時間も9月からは8時半スタートにしていただき、少しだけかもしれませんがお手伝いをさせていただこうと思っています。

（小西　信生）

サスケと仲良しの葛西さん（南町の小林茂農園で）

"もう来ないと思った"…!?

「援農ボランティア募集」のチラシを見て、竹田勇さんに連絡して、ボランティアをすることにした。援農ボランティアをするにいたった理由は、離職時にまでさかのぼる。私は渋谷区に学校警備主事として32年間勤め、定年後に1年の再任用（区民会館）をへて61歳で離職した。離職した翌月の平成20年4月26日に、よき環境を求めて世田谷区から府中市本町に移転してきた。

そのとき、今後の行動指針として大きな3本柱を決めた。□勉強をし直す□登山を続ける□ボランティアをする。現在、離職して4年目に入ったが、八王子学園都市大学に通って4年目。山には20代から約40年登り続ける。ボランティアは府中市運営の障がい者成人教室「あすなろ学級」への支援と（4年目）、当会への入会である（2年目）。そのほかとしてスキーと旅行の2つがあるが、こちらも結構活動している。したがって、現時点では自己実現率100％である。

さて、前置きが長くなった。市村農園（押立町）で作業した最初の日は平成22年7月22日（8:30～10:30）の炎天下だった。自転車で約30分のところだ。骨太で、いかつい感じの市村さんに笑顔で迎えられた。ハウスでの作業は温度計を見ると44度だった。全身汗まみれになって作業するも、適度の水分補給と根をつめずに時々ハウスを出て身体を休めた。作業をおえて話すと、その博識ぶりに驚く。机上の論ではなく、農地・大地という実学の場に根ざした知識と経験なのだろう。

「お宅はもう来ないと思った」と、次の作業日に言われた。なぜと聞くと、「あんな暑いところで作業すると、次には来なくなるもんだ」と人懐っこく笑った。

現在は、自宅から歩いて10分ほどの小林茂農園（南町）に移籍し、サスケ（写真の黒犬）の歓迎をうけて農作業にいそしんでいる。

（葛西　利武）